

## 〈被爆マリア像の首を盗む話〉小考：「マリアの首」『地の群れ』「ザ・パイロット」

畑中，佳恵  
福岡教育大学：非常勤講師 | 立教大学日本学研究所：研究員

<https://doi.org/10.15017/1903746>

---

出版情報：九大日文．29，pp.80-97，2017-03-31．九州大学日本語文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 〈被爆マリア像の首を盗む話〉

## 小考

——「マリアの首」『地の群れ』

「ザ・パイロット」

HATANAKA  
Yoshie  
畑中 佳恵

### 1 長崎原爆の遺構をめぐる議論と「悲しみの聖母像」

煙突は鈴のやうに曲り

石の鳥居が一本足で立つ

狂乱の世界を

天使は火に追はれ

麻利亜は煙にむせび

焼けただれた皮膚をひきずつて

人間が生きながら見た

八月九日の地獄

その日から

十年一日

長崎の空から降る  
灰の雨

風木雲太郎「灰の雨」（昭和三〇年）<sup>(1)</sup>より

原爆投下後の夏に長崎へ帰郷した詩人・風木雲太郎は、時を経て核実験とその放射能雨を憂えた詩「灰の雨」に、「十年一日」と記した。彼にとつて不変の光景——故郷が『地獄』と化した光景のなかには、煙にむせぶ聖母マリアが思い描かれている。この被爆のマリアにモデルがあるとすれば、浦上天主堂跡に昭和三三年まで立つたまま残存していた「悲しみの聖母像」以外には考えにくい。

浦上天主堂は爆心地から東北東に約五〇〇メートル。昭和二〇年八月九日の原爆被災で命を落とした信徒は八五〇〇名を数え、建物は一部の壁を残して全壊するなど大きな被害を受けた。そこに安置されていたマリア像は、凄惨な場面に立ち会い身体に生々しい痕跡を刻んだ主体として、長崎原爆の表象に散見される<sup>(2)</sup>。大正一四年に完成し東洋一と称されたこの天主堂には、石像、木像、陶器製を合わせ少なくとも五体のマリア像が所蔵されていた<sup>(3)</sup>。そのうち、女子が礼拝所へ出入りする南側のアーチ形玄関に据えられていた石像が、「悲しみの聖母像」（約二メートル）である。原爆によつて体の前で組んだ両手の指が欠け、右顔面をはじめ前面が黒く焼け焦げたが、倒壊を免れ、遺構のなかでもひととき目を惹くものとなった<sup>(4)</sup>。

永見津平の長編小説『五番崩れ』<sup>(5)</sup>は、昭和二八年四月の浦

上天主堂跡の様子と、マリア像を前にした者が受ける強い印象を記している。小説冒頭、主人公の森中昭太郎がラジオ番組制作のため訪れた天主堂跡は、「すごいねえ！」と声をあげる観光客で賑わっていた。森中が一瞬で心を奪われたのは、堆積した赤煉瓦のなかに残る二体の聖像である。とくに間近で見る「悲しみの聖母像」は、彼をいたく感動させた。《灼けてはいるがその表情は優しく、顔立は端正で、ぼくにも不思議な親しみを感ぜさせた。黒い火傷と優しさがまわって「悲しみの」表情になり、空に向けた目には深い嘆きの影がある。無宗教者の眼にもその悲しみが惻々と伝わってくるようなのだ》(五頁)。

小説では、天主堂跡を取り壊そうとする動きがあることを知った放送局が、《浦上天主堂の残痕問題》をテーマに番組を企画する(一三五頁)。森中は担当者として、残骸撤去を切望している教会側に取材することになった。「悲しみの聖母像」を優れた平和のシンボルとみなす森中は、《人類の罪悪史として、永久に子孫に伝えるべきだ》という絶対保存論者の立場から主任司祭に食つてかかる(一三七〜一三八頁)。主任司祭は、教会にとつてその場所がもつ歴史的な意味、そして残骸を市に移管し保存することの法的・技術的な困難を一通り説明し、《見る人に憎悪心や復讐心を植え付けるのだとしたら、(※中略)早く取り払った方がいい》(一三八頁)と告げた。森中はあらゆる立場を越えた《人類全体を包む憤り》(一三五頁)が必要であり可能であるとの意見を曲げないが、浦上信徒で被爆者のヒロイン・岩永牧子との恋愛を縦軸に進む物語は、偽善に満ちた部外者と

しての彼自身に気付かせていく。

『五番崩れ』に書き込まれた天主堂跡の処遇をめぐる議論は、当時の現実のそれとリンクしている<sup>6)</sup>。建物の残骸や聖像の撤去作業が本格的に開始されるのが、昭和三年四月。それまでの間に、長崎市長の諮問機関である原爆資料保存委員会が行った保存決議は九度に及び、地元紙は是非を問う特集や関連記事を掲載した。

とくに同年二月に開かれた臨時市議会では、市民の賛否や再建に動き出した教会側の事情、平和のシンボルとしての可否といった巷でも話題の事柄に加え、原爆遺構の意義を根本から問う質疑がなされた。議事録によると、撤去を主張する田川務市長が、《ただ単なる一片のもの》を残しても《原爆の悲惨事というものは(※中略)証明し得ない》(七一頁)と断じたのに対し、複数の議員から、二六聖人殉教碑の建立や出島オランダ屋敷の復元を例に、それらが部分的かつ偽物であつても有意義であるならば、本物の原爆遺構を残す意義は計り知れないとの反論がなされたのである。

保存派議員が言及した二六聖人殉教碑の建設と出島の史跡保存は、戦後復興期の長崎が手がけた大規模事業であり、その重要性は確信されてきたといつていい。どちらの事業も敗戦から二、三年の内に目立った動きを見せ、前者は市の聖地保存会と長崎カトリック司教区の協同で昭和三年二月に起工式が行われたばかりだった<sup>8)</sup>。また後者が着工された昭和二九年は、長崎市が観光資源となる史跡保存に乗り出したエポックとなり<sup>9)</sup>。

オランダ屋敷の正門・庭園・石倉が完成した昭和三二年一月には、オランダ女王が田川市長の労をねぎらい叙勲したことも大きな話題となった。<sup>(10)</sup> 異文化交流と関わるこれらの史跡が、不可視となった過去の一端を想起させるための「偽物」であるという議員らの指摘は、正鵠を射たものとして評価できる。

というのも、現在の観光地化された長崎に溢れる対外史の痕跡は、異国船渡来の昔からそのまま保たれてきたわけではない。大正期に『新小説』誌上でキリスト教伝来の時代を回顧した郷土史家・渡辺庫輔は、「現在の長崎を歩くと、かうした時代のおもかげは、さつぱり、想像さへされない<sup>(11)</sup>」と述べている。出島とはいえ、度重なる港湾改良事業のため埋め立てられて姿を消し、二六聖人の殉教地がどこであったかは、顕彰するにあたり地元の識者同士が討論するという有様だった。

長崎における異国関連のエキゾチックな要素は、近代化のプロセスで「既に失われたもの」として再発見されたといえる。それらが長崎の地方色として価値づけられることで、とくに大正期南蛮紅毛趣味の流行以降、異国情緒を喚起する様々な文物が生み出されていった。「長崎らしさ」をテキストとして編成したのが案内記、郷土誌、市史類などの書物であり、典型化したイメージとして広く流通させたのが「長崎行進曲」(渡辺龍夫作詞、東海林太郎歌、昭和一〇年五月、ポリドール)をはじめとする流行歌だっただろう。史跡の整備というかたちで「長崎らしさ」のモノ化を促進し、観光の具体的対象として宣伝した戦後復興期は、この流れの延長上にある。<sup>(12)</sup>

つまり、近代長崎の安定した自己像は旧き良き異国情緒を選択的に複製することで成り立ってきた。その意味で「偽物」の所有を欲することは自明の理であったといえる。そこに部分的で限定的とはいえ原爆遺構という「本物」がもたらされ、未曾有の出来事を認識し表象する際の抛り所として重宝されたこと、さらに、その価値に否定的な立場との間に摩擦が生じたことは、長崎の自己同一性と関わる「本物／偽物」が問われる契機ともなったのである。

とはいえ、拡散した論点はどれも深められないまま、当の臨時市議会で天主堂跡の解体撤去は決定された。出だしは保存に積極的だった市長がなぜ考えを変え、強弁を貫いたこともあって、関心を寄せてきた市民の理解は置き去りにされたように見える。<sup>(13)</sup> 原爆遺構の処遇をめくり未消化のまま放置された問題の幾つか——とりわけ、原爆遺構がもたらすのは平和か憎悪かという問いと、近代長崎の支柱を露わにする「本物／偽物」という視点——は、幾つかの文学作品に取り込まれ命脈を繋ぐことになった。

本稿では、田中千禾夫の戯曲「マリアの首」(昭和三四年発表)、井上光晴の長編小説『地の群れ』(昭和三八年発表)、宮本研の戯曲「ザ・パイロット」(昭和三九年発表)によって、(被爆マリア像の首を盗む話)が虚実とりませ展開されたことに注目する。三作品とも「悲しみの聖母像」の処遇が取り沙汰された記憶の新しい昭和三〇年代に生み出され、ほぼ同時代の長崎を舞台にそれぞれ虚構化を施したマリア像を登場させている。それを盗

み出す人間のドラマというモチーフ上の繋がりも明瞭だが、明瞭すぎるためか、その点に焦点化した解説文や先行研究は今のところ見当たらない。

そのため、三作品を発表順に取り上げて論じる以下の章では、基本的な内容の確認や事実と創作の腑分けにも紙幅を費やすことになる。小説に組み込まれた〈被爆マリア像の首を盗む話〉にあたる場面を抽出し整理しながら、先行する作品と後続との関係性に目配りしつつ小考を加えていきたい。このモチーフをめぐる各作品の着地点が、「長崎」という土地の抱える問題と交差する様を浮かび上がらせることが目標となる。

各々の切実な動機のもと、犯罪にあたることを承知で被爆マリア像の首を欲する登場人物と、それを取りまく者の姿は、長崎原爆の遺構をめぐる議論とどのように接合し、読者に何を考えさせるだろうか。

## 2 戯曲「マリアの首」——母なる首の首

田中千禾夫「マリアの首」は昭和三四年二月に新人会で初演、同年四月号の『新劇』に掲載された戯曲である。<sup>44</sup>物語の時は昭和三三年冬。マリア像の首を盗み出そうとする中心人物は、二人の女性——耳から顎にかけてケロイドのある美人でキリシタンの鹿と、貧血症に苦しむ詩人の夫と乳児と暮らし、一三年前に自分を強姦した男を捜している忍——である。看護婦として働く鹿の夜の顔は売春婦であり、忍は詩集売りの姿で鹿の客

引きをしている。そして、売春の裏側では男性の同志を集め、浦上天主堂跡のマリア像の欠片を運んでは繋ぎ合わせていた。

彼らは、その行為が犯罪にあたることを十分自覚している。夜道に立つ忍に巡査が話しかけ、マリア像の体を持ち去る《石泥棒》について情報提供を求める場面（二四四頁）で、読者もその行為の危うさを認識するだろう。服部康喜によると、実際に天主堂跡から多くの遺物が消失し、その事実は当時の市民にも知られていた<sup>45</sup>。「マリアの首」では、煉瓦片などが記念品として持ち去られた長崎の実情と交差しながら、それよりも悪質かつ切羽詰まったものとして、マリア石像の一部を盗む行為が描き出されていくのである。

このハイリスクな行動に駆り立てられる者の動機は、原爆遺構の処遇をめぐる現実と直接言及しつつ明かされていく。鹿をオンリーにしたいという羽振りのいい夜の客に、彼女は市議会の話題を振る。あなたがもし《正義派》の議員だとしたら、あれを保存するか、取り壊すかと。男は真面目に取り合わないが、市民対教会の図式で簡略に説明してみせる。《あるば永久に保存することは長崎市民全体の声じゃもんな。ばってん、教会側では、それでもなかけん困つとき。新たに天主堂は建つつとに、あのれんがの壁だけがあのまんまあすこに居すわつとると、じやまになるて言わすとばい》（二六三頁）。あくまで他人事として語る男に対し、鹿は、そのうち取り壊しが決まるだろう、マリアの首もどこかにやられてしまうだろう、そうなれば観光客たちが記念公園の平和像を訪れても《浦上のほんとの魂には触

れることはなかでしよ、と詰め寄る(二六四頁)。

鹿は《正義派》議員の考えを質し実行力のなさを憤るが、実は既存の正義にすでに絶望していた。それは自分のケロイドを元に戻すことのない正義、広島・長崎で失われた魂と肉を決して返すことのない正義でしかないからだ(二八一〜二八二頁)。そのため彼女は、二つの方法に個として可能な正義を見出そうとしていた。一つは、原爆と一体化したため周囲から侮蔑される自らの身体をありのまま、金で買える性的欲望の対象として存在させ、自他(内なる原爆と、その傷跡を拒絶する自分および他人)に復讐すること。そしてもう一つが、《八月九日の火と風との永遠の証人》(三三三頁)である浦上天主堂のマリア像を、教会や行政に頼らない強硬手段で隠れ家に保存することである。マリア像という「本物」が《ほんとの魂》を宿す以上、別の新たなシンボルは魂を欠いた「偽物」にはかならない。それゆえ近代長崎にとつて自明の所作といえる平和祈念像の建造は、鹿からきつぱりと拒絶されることになる(二六四頁)。

物語がクライマックスをむかえる第四幕で、鹿と忍、そして同志となった二人(原爆で子をつけた植字工と、片足が義足となった元軍人のキリシタン)は、降雪を合図に浦上天主堂の崩れた正面玄関前に集った。《以下の情景は実際のそれとは異なることを念のためお断わりしておく》と前置きするト書きには、原爆に肩を扶かれた鬚の聖人立像、その下方に瓦礫を台にして置かれたマリア像の首の説明がみえる(三三九頁)。それらのモデルが南側アーチ型玄関に対で設置されていた「使徒聖ヨハネ像」と「悲

しみの聖母像」であることは明白だが<sup>(16)</sup>、作者がいうように虚構化された部分も少なくない。実際にはない鬚が付与されたヨハネ像は、原爆で欠けた部分も鼻から肩へと変わり、立った状態で残っていたマリア像は、倒壊し首が落ちた無残な姿に描かれている。とくにマリア像については《忍従に耐えた庶民の母の顔》とされ(三三九頁)、両手を低い位置で組む「悲しみの聖母像」に対し、胸元に子を抱こうとする姿に設定されたことと相俟つて、もつぱら母という属性が強調された。

母なる石像の首は、自分を欲する子らの企図に耳を傾け、応援しようと思えた。重い首を持ち上げようとする《よいしょ》の掛け声に《こらしよ》と間の手を入れ、《早う連れて行かんね、うちば》と長崎弁でせつせついたのである(三三五頁)。驚き混乱する四人に向かつて、《皆さんに、うちのお乳ばたつぷりのましておあげつげんな。とつても甘か、甘かとは。そうしてからゆつくり、皆さんのご相談にのりまっしょ、ね、ね!》(三三六頁)と語りかける言葉は、受難の子らを慈しむ聖母としての意志を示すとともに、その意志が必ずしも子らの望むものとは限らないことを仄めかしてもいるだろう。

鹿と同志たちにとつて、《浦上のほんとの魂》を宿すマリア像は、自分たちを理解し鏡のように映し出す《血と死と憎しみの姿そのもの》を意味する(三三三頁)。人間は弱いからいつか再び戦争に導かれるかもしれない。そのときのためマリア像と共に憎悪を継続しようという彼らの思いは、原爆遺構の議論において危惧された負の感情を、未来の戦争を否定するために不

可欠なものとして肯定するものだった。撤去派の危惧を逆手に取って保存の根拠とするこの考え方は、教会の意志に激しく反する。

ゆえに鹿たちの思惑はプラグマティックな議論に不向きであるばかりか、とくに信者の立場から表明し難い性質のものであった。その意味で、戯曲に場を借りて顕在化したオルタナティブにみえる。小説『五番崩れ』の森中昭太郎がそうしたように、非当事者の立場から《人類全体を包む憤り》を口にするのは容易い。が、そのような語り四人が与することはないだろう。彼らの負の感情は簡単に普遍化されない。それがために彼らは、《ほんとの私》(三三〇頁)を晒せる四人と一体のささやかな共同体を成立させること、夜に紛れて永続することを悲願としているのだから。

そんな子供たちに何よりもまず乳を与え甘やかそうとするマリアの首は、彼らの憎悪に同調し掻き立てるのではなく、それを一旦受け止め慰撫する者として姿を現す。そのうえで、首が自らの意志のもと彼らと対話しようとする姿は、母子の一体感が非一体の事実を土台とするものであることを読者に思い出させるだろう。鹿ら四人が本当の自分たちを映す鏡として解釈し、危険を冒して手を伸ばしたことで、思考によつては届かなかつた被爆マリア像の素顔——自分たちに親身になって寄り添ってくれるが、代表者や代弁者に祭り上げることは困難な別の主体であること——が垣間見えたのである。

自身の声もち長崎弁で話すローカルな聖母と、彼女に己自

身を投影する受難の当事者たちの道行きがどのような結末を迎えるか、物語は教えてくれない。それゆえ読者は、「本物」として期待される存在をめぐる解釈の複数性と、その存在が解釈者たちの欲望をいなしながら共に在る未来について、未決定の広がりの中で思いを巡らすことになる。

### 3 小説『地の群れ』——破壊される首

井上光晴の『地の群れ』は昭和三八年七月特大号の『文芸』に発表され、同年九月に単行本が刊行された長編小説である<sup>(17)</sup>。この物語では、三歳の時に被爆し母を失った津山信夫がマリア像の首を盗み出す。

主要人物の一人である津山は井上による創作だが、単行本の第二表紙には《作中の津山信夫は自分だという青年が、私の家に訪ねてきた》(作者のことは)という興味深いエピソードが掲げられた。その青年は、誰にも話していないのに自分のことが小説になったと真剣に悩んでいたという。井上は《青年の中に形成されている十八年間の錯乱》に言及することで、登場人物の虚構性を明示すると同時に、物語が作者の意図を越えてリアルな現在——未だ手当てされていない錯乱という生傷——へ橋渡される光景を提示している<sup>(18)</sup>。続く扉に使用された山端庸介撮影の浦上天主堂アーチ型玄関跡の写真も、現実と虚構が相半ばする小説の性質を読者に告知するだろう。昭和三三年の原爆遺構をめぐる長崎の実情はこの作品にも大胆に取り入れられ、

とくに津山を軸に描出される問題と密接に絡む。<sup>(9)</sup>

原爆を受けても無傷だったが心が荒んだといわれている津山は、小説世界の現在時から四年前の昭和三年五月、浦上天主堂跡で何処かへ運ばれるのを待つマリア像を自分のものにしたくなった。顔半分を放射能で焼かれた作中のマリア像は、「悲しみの聖母像」をモデルに顔の傷痕が右側でなく左側とされ、材質が石から銅に変更されるなど虚構化されている。<sup>(10)</sup>津山は、遺構の撤去問題をめぐって《憎悪をかきたてるだけのああい建物は一日も早く取りこわしたほうがいい》(二九頁)とした教会側の見解やそれへの反論を想起しながら、横倒しにされムシ口を被せられた像へと近づいていった。

額に二匹の蠅が留まったマリアの首から彼が受けた衝撃は、曰く言いがたいものとされるが、<sup>(11)</sup>後に自身の母の面影を重ねていたことが判明する。またその心情は、被爆の痕をさらして苦しみながらも強く生きつつ、《平和ということ以外にあの像を想像することができません》(三〇頁)と主張した下半身不随の女性へのシンパシーも伴っていた。津山にとってマリア像は、被爆して死んだ彼の母と平和が一つに結びあう身体の形象として欲されたようにみえる。

彼が手を伸ばしたマリアの頭部は、蠅が好む死肉のようにグロテスクで、荒々しい物質性を備えていた。それは銅製の像として設定されたことで、親愛を求める者をも傷つけうる、表面の硬く鋭い質感が強調されている。また一方で、親愛を示す者のささやかな接触が首を裂いてしまうほど傷つきやすくもある

その、傷口からのぞく濃い緑——血の通う人間とは対照的で、なおかつ花のように生々しい内部——が印象づけられている。<sup>(12)</sup>

彼はムシ口をかけられたマリヤ像の口もとにそつとさわつてみた。(※中略)マリヤ像の唇は、彼が思わず手を引くほど、鉋の刃先のように鋭く、かさかさにとげだつていた。

雨が降りつづいているにもかかわらず、濡れた感触がなく、誤まつて指先を滑らせれば、ざくりと肉を抉られてしまうような赤茶色の波が、上唇と鼻の間を二本、平行して走っている。彼は静かに手を黒い歪んだ頬に移し、つづいて髪のところを撫でようとした。その時、彼の手が髪の毛にさわったかさわらぬかした瞬間、マリヤ像の顔がぐんと揺れ、首筋に何か濃い緑色の花でも咲かせたような裂け目ができた。(三〇～三一頁)

この互いに相容れず害し合うような経験は、しかし、津山を怖じけさせるものでなかった。マリアの首が彼自身とは別の主体として彼を拒絶するとしても、彼は母子の非一体感を当然のように受け入れ母を恋う。津山が求めるのは、母と平和の一体となつたマリア像のありのままの姿であり、自分を映す鏡ではないのだ。

マリアの首を盗み出して凝視した津山は、そこではじめて、《とらえようのない怒りと不気味な恐怖》(三四頁)を感じるようになる。彼が首のなかに認めたのは、自分の母を加害した者



の顔であり、自分に恨みをもったまま爆死した浦上信者の顔だった(三三三、三三三頁)。原爆を使って自分の母の命を奪った加害側にいるのもまた母と子であること。そして、長崎において差別の辛酸を舐めてきたキリシタンと舐めさせた自分たちは、同じ側で被爆の辛酸を舐めた後も相対し続けること。母なるもの、そして被爆者なるものが憎み憎まれる関係をそれぞれ内包しており、ほかならぬ自分もまた、母を憎み被爆者に憎まれる当事者の一人である——という首によつて導かれる現実を、津山は受け入れられず、混乱したまま首を砕く(三三三頁)。

加害／被害関係の錯綜は、苦楽を呑み込む一对の母子の領域のみならず、あらゆる個人が無関係でいられない社会集団に堆積している。戦争はひっきりなしに集団間および集団内の加害／被害関係を生み出し、地域に浸透する差別の加害／被害関係がそれと絡み合う<sup>(33)</sup>。この状況下、あらゆる母と対立しない母、あらゆる被爆者と対立しない被爆者は、聖性を纏わせられたイメージのなかにしかない。被爆した聖母像と平和を(あるいは平和の裏返しとしての憎悪を)直結させるイマジネーションは、この複雑な対立構造を生きる者の目を現実から背けさせるだろう<sup>(34)</sup>。津山は、被爆したマリアの首に個人的な母や普遍的な母性のイメージを投影することなく、あるがままを認識しようとした。が、その結果である複数の顔と自身の関係性を直視することはできなかった。

彼は衝動的にマリアの首を破壊した後、ひどく取り返しのないことをした気持ちで代わりとなる首を探しに行く(三四

頁)。その行為は間もなく、母と同年代の浦上信徒の女の後をつけて抱きつく所行へとすり替わり(三七七頁)、あくまで中途半端な代償行為でしかないことを露呈する。原爆遺構として紛れもない「本物」であるマリアの首が見せたものを拒絶し、代わりの本物もどきを探す欺瞞。津山が己の欺瞞を察していることは、物事の表層を取り繕うことに終始する人間を見つけては嫌悪し、《みんな、いんちきじゃないか》(三五九頁)と度々口にするようになった自虐的な態度からも読み取れるだろう。

彼が浦上信徒からの報復、警察による拘束という代償を払い、怒りと怖れに苛まれながら盗んだ首のなかに見たものは、被爆した母と平和が結ばれているという予断を裏切るものであつても、《いんちき》なものではなかつた。首の件を知つた七人の浦上の男たちに小突かれ、隠れキリシタンの時代まで遡る彼らの恨みをぶつけられたことを、四年後の津山が思い出しながら、ふと、《死んだ母親も浦上の信者ではなかつたのか……》(三七七頁)という突拍子もない疑問を抱くのは、かつて自分がマリアの首に覗き込んだものに根底から揺さぶられる経験があつたからに違いない。津山が接触した被爆マリア像は、原爆被災によって複雑さを増した長崎の深部に当事者としての認識をいざなう。『地の群れ』における原爆遺構の意義を指摘するなら、この点をおいてほかにないはずだ。

それでも、平和を期する者自身が取り込まれている複雑な対立を冷静に受け止めること、ましてや中断させたり解消したりすることは困難を極める。小説後半には、その難しさが昭和三

七年の光景として改めて具象化されているだろう。発端は、福地徳子という少女の強姦事件だった。容疑をかけられた津山と真犯人の宮地真が住む海塔新田に、徳子の母・福地松子は直談判しに乗り込む（二八六頁）。

海塔新田は作者の創作にかかる架空の集落で、被爆者が寄り集まった佐世保市外のその地区は、長崎の新たな被差別部落として定着しつつある場所として描かれた。作者自身がこれについて、《原爆被害者の状況を追求すればするほど、そういう未解放部落を想定せざるをえなかった》と説明している。《現実の状況をどこまでも追いつめていくことによってそれを反対物に転化していく。どうにもならない状況、出口のない状況をえがきだすことによって、逆にその状況を解放する手段を発見する》ことを自らの小説に課す井上光晴は、原爆被害者の部落化という現実には想定可能な袋小路を小説世界に呼び込むことで、この地を抱える対立構造を最深部から掘り返すことを試みたのである。<sup>55)</sup>

この海塔新田で松子に対応したのは宮地の父だった。彼は集落の目を気にしてかっとなり、母子が被差別部落の一員であることを揶揄する。松子は娘が被差別者として暴行されたと解釈し、侮蔑の言葉を投げ返した。《あたし達がエタなら、あんた達は血の止まらんエタたいね》《ピカドン部落のもんといわれて嫁にも行けん、嫁もとれん》（二八七、一八八頁）。暗がりから様子をうかがっていた集落の人々はこれを聞き、彼女に石を投げ始める。こめかみを石に撃たれて絶命するその姿が、コンク

リート片で碎かれたマリアの首を読者に彷彿とさせることは言うまでもないだろう。このとき無意識のうちに石を握りしめ、松子の悲鳴を《自分の耳ではなく、人の耳で聞くような感じできいていた》（二八八頁）津山は、《ピカドン部落のもん》と名指された一つの属性に全支配されていたようにみえる。

松子もまた、部落という単位で思考し事に処すことを当然としてきた者であり、母であるが故に子を害する者への報復を厭わない者でもあった。津山はこのとき、集団間の軋轢を背負って被害/加害の両面を烈しく生きる母なるものと、実際に対峙したことになる。そして、四年前と同様、《インチキ》でないがゆえに平和から遠い母——錯綜する対立関係を内包し、彼に当事者であることを迫る存在——を反射的に拒絶して、再びマリアの首を砕いたのだ。<sup>56)</sup>

被爆マリア像が「本物」の長崎原爆遺構として一人の青年の根底を揺さぶったとしても、彼がその不快な揺さぶりを耐え、目の前の人間との敵対関係を抗う力へと換えるのは、かくも困難であるということ。リアルな課題が虚構と交わり先鋭化した小説世界において、読者が辿り着くのは、「本物」を欲するか否かがこの困難と向き合うことを選択するか否かと同義になる光景だろう。

『地の群れ』の被爆マリア像は、願望を反映し満たすどころか、グロテスクで混沌とした、決して見たくない自分たちを映す鏡として迫ってくる。それを暴力の応酬のなかで今一度叩き壊すことなく、《状況を解放する手段》（前掲）「私はなぜ小説を書く

か」と結ばれるものとして想像することは、作中の当事者たちから一步間合いをとる読者にとつても重い作業となるに違いない。

#### 4 戯曲「ザ・パイロット」——神聖な「偽物」

宮本研の戯曲「ザ・パイロット」は、『新日本文学』昭和三年一〇月号に発表、四〇年四月に劇団俳優座で初演された戯曲である。<sup>27)</sup> 初演に先立つて作者自身が執筆の背景を明かし、広島への原爆投下にパイロットとして関わったクロード・イーザリー元米空軍少佐のその後を知ったのが執筆のきっかけであったこと<sup>28)</sup>、イーザリーを主人公とした長編小説である堀田善衛『審判』(『世界』昭和三年一月〜三八年三月発表)と、いいた<sup>29)</sup>。もも『アメリカの英雄』(『新日本文学』昭和三年一月〜九月発表)の両作品を意識しつつ構想したこと、謡曲「安達原」の影響で、過去と現在がせめぎ合いながら結果的に調和していく能と構造的に似たものとなったことを説明している<sup>30)</sup>。これら作者が整理した問題系の外にあって殆ど指摘されてこなかったが、「ザ・パイロット」は《被爆マリリア像の首を盗む話》の系譜に連なる一面をもつ<sup>31)</sup>。

新天主堂完成後の、昭和四〇年八月という至近の未来に設定された戯曲の世界でマリリアの首を盗むのは、かつて自分が原爆を投下した長崎へやってきた男、元米空軍中尉クリストファ・リビンゲストンである。「マリリアの首」と『地の群れ』に共通

する筋——第二次大戦と原爆の被害者たちが自ら所有するため浦上天主堂跡からマリリアの首を持ち出す——は、原爆を落とした加害者が一被害者に換金させるため原爆資料館から強奪する、というかたちに換骨奪胎された。

アメリカで英雄視され、原爆投下の罰も、戦後に八度繰り返した強盗の罰も受けられないことに苦しんできたクリスは、長崎で生まれ祝家の養女となっている一八歳の実子・祝あぐりの許を訪れる。彼には、罪を背負う者が数多く殺されてきた歴史をもつ長崎であれば自分も罰せられるのではないか、という期待があった(二二七頁)。理不尽にも罪人として迫害されながら信仰を守ってきた浦上キリシタン、そして彼らのモニュメントである天主堂を原爆が殺傷・破壊したことは、自分たちの隊が神の加護のもとに出撃した事実を知るクリスにとつていつそう理不尽であり、なぜかと自問せずにはられない(二二八頁)。

宮本研はこの作品を執筆するにあたり、長崎原爆を落とされた側にも落とした側にも《不条理》があり、固まりのようになつたその《不条理》を解きほぐすことを意図していたと述べている。作者が紹介する、《長崎の人たちは長崎に原爆が落ちたとはいいません。浦上に落ちたというんです》という市内在住者の言葉は、浦上キリシタンへの加害の歴史が落とされた側の《不条理》を深刻にする一つの要因であることを示しているだろう<sup>32)</sup>。また作中で、戦争中に防空監視哨の哨長を勤めていた祝六平太が、あの日B二九を捕捉し損なつた自分を責め原爆投下に責任を感じるのも(二二六頁)、落とされた側が抱える《不

条理』の一つに数えられる。長崎における被害／加害関係の錯綜という『地の群れ』の主要テーマは、ここに一部が引き継がれているだろう。「ザ・パイロット」ではさらに、落とした側の『不条理』がクリスの言動をとおして描かれていく。それにより、原爆加害者としての罪を認めないアメリカ社会や、クリスチャン同士の加害／被害関係の問題、だけでなく、原爆による大量殺人の罪は（そして愛しい一人を死に至らせた罪も）決して償いえないという加害側の苦境が浮き彫りになっていくのである。

クリスは密航によって日本に入国すると、浦上の家野にある祝家に身を寄せ、翌日から天主堂の MARIA 像を一日中眺めていた（二一三頁）。新しくなつた浦上天主堂の正面に「悲しみの聖母像」が移設されたことを知る読者は、彼がその像の前で母国で得られなかつた罰と許しを求めていると推測できる。とはいえ、彼が盗むのはこの「本物」ではない。

ある日、サンタ・カララ教会跡を見下ろせるキリシタン墓地<sup>(12)</sup>にどこからか壊れた石像の胴体を運んだクリスは、それと合致する MARIA 像頭部を、盂蘭盆の初日に原爆資料館から強奪してくる（二三八〜二九九頁）。あぐりを孫として育ててきた祝筆が広島で偽の原爆瓦を売買しており、それを刑事に咎められたと知つたからだつた。《ばばしゃま、これ売つてください、これ本物の MARIA 様、これならつかまらない、たくさんお金になる、これわたしのプレゼント》（二三四〜二三五頁）。完成した石像は紛れもなく聖母 MARIA であり、自分を責めず許してくれている長崎の人に報いたつもりのクリスは、ひどく上機嫌だつた。

そんなクリスに筆は、彼が繰り返してきた強盗は彼が望む罰をもたらさない虚ろな行為であり、もはやただの癖でしかない」と叱責する。長崎で許されていると考えるのは大間違いで、そもそも人間には人間を許す力がない。だから、何処に行つて誰に会おうと罰せられない現状こそが、彼の受けている罰なのだ。クリスは、終戦の年に彼が長崎で知り合い置き去りにした日本人売春婦・踏絵と、被爆していた彼女が亡くなる前に生んだあぐり、そして全ての日本人から憎まれていると感じ、自らの死を望む。その後間もなく、被爆が原因の白血病で倒れた筆は、クリスを憎んでいないばかりか、彼の《ちつとばかり足らんところ》を我が子同様に愛おしみながらこの世を去つた（二六四頁）。

物語を振り返れば、祝筆は「偽物」と縁が深い人物である。彼女は紛い物の原爆瓦をアメリカ人に売ることを生業としてきたが、彼女にとつてそもそも「偽物」の原爆瓦と「本物」のそれに大した差はない——《本物だからちゅうても、やつぱ、火で焼けたただのガラクタじゃなかですか。……ガラクタはガラクタですたい、刑事さん》（二九九頁）。戦後の二〇年間に広島・長崎の原爆遺物は姿を消し入手しようもないが、人間は《何か形のあるもんば欲しがら》（二九九頁）と刑事に説く筆のなかで、「本物／偽物」の二項対立は崩れ、「偽物」を必要とする人間の営みが肯定されている。浦上天主堂の鐘の音に自然と十字を切る筆は、隠れキリシタンの役職をつとめた家の未裔だが仏教に宗旨替えした、いわば「偽者」のキリシタンでもあつた（二

「ザ・パイロット」のクライマックスでは、この筆が、被爆の聖母を想起させる存在としてスポットライトを浴びることになる。「本物」の原爆遺構である新天主堂のマリア像や、原爆資料館に首が所蔵されていたマリア石像、そして、登場人物のうち聖母マリアとの関連づけが顕著なあぐり——マリア観音を贈られたり、筆から生きたマリアと呼ばれたり、最終的には妊娠していることも判明する美しい娘（一五三、一四三、一六五頁）——よりも、作中で直接的には一度も聖母マリアと結びつけない筆に、最も重く神聖な役割が与えられているのである。

死に瀕した筆が、実子の六平太と居候のクリスの二人を思い浮かべ、《満足じゃなかどもほど親は……》と繰り返すシーン（一六四頁）。ト書きによると彼女は、墓地全体に見立てた舞台の《みんなを見おろす場所》、すなわち超越者の視点からこの独白を行う。しかも、クリスは六平太によると殺されるべきイエス・キリストであり（二六〇頁）、その母親を自認することは聖母マリアを自認することにほかならない。つまり筆は、被爆の聖母の真価を發揮するかのように、原爆を落とした敵国パイロットかつ強盗九犯<sup>(34)</sup>という属性をもつクリスを、ありのまま何の根拠もなく受け入れた。その光景が大きな見せ場となっているのである。

救いのない憐れな人への慈悲とは殺してあげることだと考える筆は（一三三頁）、それを実行しない自分を慈悲深い者と認めないに違いない。それでも、偽の信仰者として、また偽の原爆

遺物売りとして長崎の《不条理》を生き抜いた筆は、被害側の《不条理》を抱える実子だけでなく、加害側の《不条理》に苦しむ受難者をも子として愛した。長崎原爆がもたらした対立構造を越えて目の前の一人の他者の弱さを叱り、その弱さごと我が子のように慈しむことが可能であることを——この作品は、遠い未来でなくほんの一步先の光景として——示したのである。《人類の心はひとつ。世界の平和は長崎から。》というお定まりの文句を耳にすると、《ばってん、人類人類て聞くと、何かしらん、チンパンジーのごたるねえ》（一二二頁）と斜に構えていた筆。人類規模の平和を語ることから距離をとってきた老女の生は、しかし、それと決して無縁でなかったと読者は気がつかされるのだ。

フィナーレで筆の人生を肯定するように賑やかに鳴り響くのは、八月一五日の精霊流しの祭り囃子と《聖母マリアがいうこと》にや。浦上じゅうが焼野原 助けてやりたいとこなれど ござらんわたしもこの姿》という歌である（二六五—二六六頁）。浦上天主堂の被爆マリアは無力であるというメッセージ。それは、「本物」として承認されているものへの期待を一旦おき、「偽物」にまみれて生きる目の前の有限の存在に目をこらせというメッセージでもあるだろう。

## 5 三作品の着地点と「長崎」の問題

風木雲太郎の詩「死の灰」をはじめ、浦上天主堂の聖母マリ

アは比較的早い時期から長崎原爆の表象にとつて親密な要素となつてきた。キリシタンとその文化をエキゾチックなものとして自らの地方色に組み込んできた近代長崎の営為は、それを後押ししただろう。そして、昭和三年に頂点に達した原爆遺構の存在意義が政治的に播らがされる状況は、異文化交流の痕跡を選択的に複製してきた「長崎」の有り様が問われる場面ともなつた。

浦上天主堂跡の保存問題が話し合われ、撤去が現実化する情勢に素早く呼応したのが田中千禾夫の戯曲「マリアの首」であり、それに続いたのが井上光晴の小説『地の群れ』だつた。この二作品は、「本物」の原爆遺構——読者に「悲しみの聖母像」を想起させる架空の首——が暴力的なまでに必要とされる様を描いている。といつても、永見津平の小説『五番崩れ』の森中昭太郎にみられるような、保存論への素朴な賛意が表明されたわけではない。

受難者たちが窃盗というかたちで「本物」との個人的な接触を試みることで、「マリアの首」では、負の感情を共有する鏡のような存在であつてほしいと願う鹿らは肩すかしを食らい、予想だにされなかつた超越者自身の声が発される。超越者でありながら長崎弁で意志を表明し、母の役割を担う(字とは別個の)主体としてコミュニケーションを開始しようとする彼女が、何を語りどう振る舞うかは、空白のまま読者の想像に委ねられた。無言で佇む現実の「悲しみの聖母像」は、見る者にとつて都合の良い鏡として容易に利用されうるだろう。それを抑制するフ

イクシヨナルな枠組みの中で読者は、保存した彼女と共に在るとはどういうことを想像することになる。

『地の群れ』では、「マリアの首」における鹿らの願望とその顛末をふまえたかのように、マリア像に自己を投影しなかつた津山信夫が、やはり自身の予断を裏切られることになる。マリア像は彼が見たくない顔を差し向ける鏡として現れ、共に在ることの可能性よりはその難しさを突きつけた。

『地の群れ』の被爆マリア像は「マリアの首」のそれと異なり無言を貫くが、福地松子という声と命をもつた母と二重写しにされる。それにより、被害と加害に割り切れない烈しい母の属性を宿す姿は津山の幻想などでなく、「長崎」に巣くう複雑な対立構造を生きる者の現実であることが示された。困難を最大化して表出することで活路をひらくという作者の信念は、作中における被爆マリア像の位置づけ——差別と暴力にまみれた戦後長崎の深奥と結びつき、それゆえ破壊衝動に晒されるものとしたこと——にも顕著だろう。二度にわたる破壊が問題を解決しないことを知る読者には、それを反転させる選択が期待されているように思われる。

原爆遺構が撤去され、新天主堂の正面に「悲しみの聖母像」が移設された後の戦後二〇年目を足場にする宮本研の戯曲「ザ・パイロット」では、新たな観点を盛り込む(被爆マリア像の首を盗む話)が提示された。浦上天主堂の被爆マリア像は戦後長崎の人々と共に在ることがひとまず確定しており、それゆえリスクを冒して入手しようとする者は現れない。「長崎」と安

定的な関係を取り結んだ天主堂の無言のマリア像は、日参するクリストファ・リビングストンを罰しも救いもしなかった。もう一つの「本物」である、資料館から盗み出されたマリア像頭部も、金銭価値と結びつけられた点で救いから遠いものに描かれている。

「本物」の価値を失墜させる物語は、先行作品で重視されなかった「偽物」を前景化していく。加害側の苦境に身を苛んでいるクリスを丸ごと慈しんだのが、偽のキリシタンであり偽の原爆遺物売りである被爆者・祝筆だった。その姿は、苦楽を併せ呑む一対の母子の存在形態を、(深い対立があるはずの、究極的には理解が叶わぬ)<sup>35)</sup>他者との間に実現しているだろう。許し許されなくても敵対関係は必然でない。身をもつてそれを示す彼女は、外部の偽善者のように「人類の平和」を声高に語らずとも、それと地繋がりに生きたのである。

「本物」と深く関わることを促す前二作品とは対照的に、「ザ・パイロット」は、「本物」として人々に承認されるものとは別の、「偽物」が溢れる巷に有限の身体として生じる「本物」を見逃さないよう読者に働きかける。そのとき、自己再生産の痕跡である「偽物」の存在価値を自明視し、未曾有の出来事の痕跡たる「本物」を扱いあげねた「長崎」と、そこに生きる人間の視点を欠いた「本物／偽物」の二項対立それ自体が、それぞれ問題含みのものとして読者に対象化されるだろう。

今も長崎の浦上天主堂で人々と対面し続ける被爆マリア像とは、いったい何なのだろうか。この素朴な問いに、問う者の属

性を等閑に付した唯一の答えを用意することはできない。然はあれ、この原爆遺構を前に「平和か憎悪かという問いは適切か」「自分が欲する姿を対象に投影してはいないか」「錯綜した被害／加害関係を乗り越えるために何ができるか」と思考を巡らす者への手がかりは、この三つの(被爆マリア像の首を盗む話)が与えてくれるはずだ。

※ 本稿は『読む原爆文学事典(仮)』(青弓社より二〇一七年刊行予定)で執筆を担当した項目「被爆マリア」の一部を基にした。

#### 【注記】

1 風木雲太郎「灰の雨」(『詩集 長崎詩篇』東峰書房、昭和三〇年二月、二九頁)

2 本稿で言及しない関連作品に、田中礼次郎の詩「再建天主堂」(詩誌『活火山』別冊パンフレット『原爆野外詩展作品集』、昭和三六年八月)、山田かんの詩「立つたまま眠る」(『長崎時事新聞』昭和四〇年四月一日)、松永伍一の詩「叫び声——長崎のキノコ雲を見た私の生涯の記憶のために」(『反核——私たちは読み訴える 核戦争の危機を訴える文学者の声明』岩波ブックレット、昭和五七年四月)、原之天の絵本『長崎平和絵本シリーズ2 悲しい顔のマリア』(汐文社、平成三年一月)、木村淳子の詩「彼女は黙っていた——被爆のマリア像によせて」(『原爆詩一八一人集』コールサク社、平成一九年八月)等がある。

3 『長崎市史 地誌編神社教部下』(長崎市役所、清文堂出版株式会社、昭和一三年四月)

4 「悲しみの聖母像」は、現在「被爆マリア」として国内外に知られるマリア像頭部とは異なる。原爆被災で両目の水晶が失われ空洞となり、頬と髪が黒く焦げた「被爆マリア」は、旧浦上天主堂東側の聖処の大祭壇に掲げられていた「無原罪の聖母像」（木製彩色、台座を含み約二メートル）の一部である。川添猛「ふるしき賛歌」（聖母の騎士社、平成六年三月）によると、北海道トラヒスト修道院の野口嘉右衛門が故郷の浦上に復員した際、天主堂跡の瓦礫の中から頭部のみを発見し、それから約三〇年間、個人的に保管していた。そのため、「被爆マリア」は昭和五〇年頃に『北海道新聞』で報じられるまで世に知られることがなかった。なお、この「被爆マリア」をモチーフとした小説に田口ランディ「被爆のマリア」（『文學界』平成一七年八月〜十一月号）がある。

5 永見津平『五番崩れ』（長崎文献社、昭和四九年七月、※単行本表紙は「悲しみの聖母像」が立つアーチ型玄関附近の写真）

6 地元でなされた議論は服部康喜「ある都市の選択（承前）……田中千禾夫『マリアの首』と浦上天主堂再建計画」（『文学批評 彼説』V、平成四年一月）、横手一彦「長崎 旧浦上天主堂」355-58——失われた被爆遺産」（高原至写真、ブライアン・パークガフ二英訳、岩波書店、平成二二年四月）に詳しい。

7 議事録は横手一彦「旧浦上天主堂被爆遺構の存廃に関する公的な議論」（『平和文化研究』三二二号、平成二三年）所収の再録による。反論にあたる部分の詳細は以下の通り。岩口夏夫議員が《それでは何のために十六聖人の記念碑を今建てようとしているのであるのか》（※ママ）であろうか。あるいはまた例のオランダ屋敷の復元も、オランダ屋敷を復元したからといってオランダの気持を理解することができませんか》（七二頁）と

発言、荒木徳五郎議員がそれを引き継ぎ、《偽物さえ価値があるのにあの本物（※注、浦上天主堂跡）をそのまま残しておつてごらんない。どれほど貴重な価値がありますか。たとえあれを昔の出島の蘭館跡というような元の状態のまま残さんでも、あの蘭館の偽物を一つ復元しただけでも十分な価値を発揮しておるではないですか》（七六頁）と発言した。

8 長崎における二六聖人顕彰の経緯については畑中佳恵「二六聖人殉教者像をめぐる文学言説——永井隆、坂口安吾、遠藤周作、吉村昭の殉教者像——」（『近代文学論集』四一号、平成二八年二月）に詳述した。

9 『市政百年 長崎年表』（長崎市役所、平成一年四月）

10 「オランダ屋敷の復元なる オランダ女王から市長に叙勲」（『長崎市政展望』八一号、昭和三年二月）

11 渡辺庫輔「長崎の回顧」（『新小説』大正一一年三月、四八頁）

12 長崎イメージが明治から昭和にかけて様々なメディアを通じ形成されていく過程については、挽地佳恵「長崎」イメージの形成と「私たち——土地の名に働きかける——」（博士申請論文、平成二五年七月、立教大学へ提出）で論じた。

13 当時の事情の不透明さは、現在に至っても解消されたとは言いがたい。高崎毅「ナガサキ 消えたもう一つの「原爆ドーム」（平凡社、平成二一年七月）は、田川市長がアメリカへの視察旅行を経て撤去論者に転じたことに着目し、パブリック・ディプロマシーの対象としてアメリカの安全保障に益するような懐柔を受けた可能性を指摘するが、確証は得られていない。

14 以下の引用は『田中千禾夫戯曲全集 第一巻』（白水社、昭和三五年五月）による。田中千禾夫は長崎県長崎市出身で、慶應義塾大学入学を機



に上京。終戦は疎開先の鳥取で迎えている。なお同作により岸田演劇賞と芸術選奨文部大臣賞を受賞した。

15 服部康喜「ある都市の選択……田中千禾夫『マリアの首』と浦上天主堂再建計画」(『文学批評』綾説)Ⅲ、平成三年一月)

16 これに関連して、俳優座(昭和五三、五五年)やグループ演劇工房(昭和六四年)による「マリアの首」公演のパンフレット類に、「悲しみの聖母像」の図案が用いられたことを確認できる。

17 以下の引用は『地の群れ』(河出書房新社、昭和三八年九月)による。

福岡県久留米市生まれの井上光晴は、幼少期を長崎県の佐世保や崎戸町で過ごし、中学卒業検定試験を経て上京した。第二次大戦中は多摩陸軍技術研究所に配属、終戦時は佐世保に戻り炭鉱技術者養成所で教鞭をこつていた。その後、結婚を機に再び上京し本作等を執筆した。

18 ただし、作品の発表からこのエピソードが公表されるまで極めて短期間であったことや、自身の経歴にも虚構を張りめぐらせた作家のスタンスを顧慮する限り、この青年の件を事実と断することは難しい。同エピソードは、単行本刊行に先立つ八月にエッセイ「十八年間に形成された錯乱」(『信濃毎日新聞』昭和三八年八月四日)で公表された。それによると、青年が来訪したのは作品発表直後の七月だったことになる。

19 『地の群れ』には、もう一人の主要人物である佐世保の医師・宇南親雄を軸に、多岐にわたる差別と被爆の遺傳的影響の問題が描かれる。本稿では割愛せざるをえないが、津山を軸とした物語は宇南のそれと併走・交差するものとして重層化されている。母が被差別部落出身かもしれないという疑念、戸島海底炭鉱の朝鮮人炭鉱婦を妊娠させ保身のため見捨てた過去、娘への差別を怖れ被爆の事実を否認する患者の母とのやり取

り(その際は彼自身が入市被曝者であることも話題となる)が関わる宇南の闇は、妻に宿る胎児を殺すというかたちで表面化する。

20 本稿では、津山を取り調べた係官が《あの固い銅のマリア像がそんな簡単に砕けるはずがない》(三四頁)と執拗に問いただしたことを主な根拠に、作中の像を銅製と判断した。ただし、津山金代は孫が《マリアさんの石像さん》(二四頁)を壊したと警察で聞かされており、それを知人に話す際は《耶穌の顔を彫った銅像みたいなもん》(一五頁)と説明している。材質の断定を避けるような言い回しは、後にマリア像を手にした津山が《金属でも石でもなく、何かほかの天から落下してきた第三の物体のように思える》まで凝視する場面(二三頁)に効いている。

21 作者のエッセイ「十八年間に形成された錯乱」(注18参照)には、昭和三三年五月三日、撤去作業が終盤となった浦上天主堂跡の様子が記されている。これによると、天主堂跡で一日を過ごした井上光晴は、雨の中を小一時間佇みムシロをかけられたマリア像に近寄っていく青年を見かけた。声をかけると青年は、打ち壊しが決まっただけでなく、そのような形来てしまうと語ったという。出来事の事実性はさておき、そのような形の群れ」の津山の物語であると整理できる。

22 ここでの緑色には、銅の緑青や、血の赤の対照色であることに加え、先行作品である戯曲「マリアの首」とのイメージ上の繋がりを指摘できるかもしれない。「マリアの首」には、緑色に取り憑かれた治五郎という男が登場する。少女だった忍を暴行し、彼女の母の形見である指輪を奪った彼は、入市被曝による死期が迫るなか忍と再会した。治五郎が強迫観念のように語る遠い夢の中の緑、ダイヤの指輪の緑の光、自分が死ぬと

きに目から吹き出すだろう緑の血は、被曝者であり加害者でもある彼の内面を表現するキーワードとなっている。

23 加害／被害関係の錯綜は、『加害者が同時に被害者であり、被害者がまた何者かを加害する重層的な罪の構造』を読み取る高橋和巳の同時代評（『本格小説の可能性——『地の群れ』の方法を中心に——』、『新日本文学』昭和三十八年九月、五〇頁）をはじめ、複数の論評により指摘されてきた。

24 これに関連して、熊井啓監督の映画『地の群れ』（昭和四五年）を分析した片岡佑介「原爆映画におけるマリア像と母の声について・熊井啓『地の群れ』を中心に」（『言語社会』九号、平成二七年三月）は、無垢で清らかなものとして、米軍の原爆投下責任と日本国民の戦争責任の追求から目を逸らせることに貢献してきたマリア像が、映画『地の群れ』においては不気味なものとして描かれることに注目している。

25 井上光晴「私はなぜ小説を書くか」（『朝日ジャーナル』昭和三九年五月三一日）『井上光晴集——戦後文学エッセイ選13』影書房、平成二〇年二月、七五〜七六頁）

26 小説結末部で字南の耳に入る噂話では、殺人現場に落ちていたのは血の付いた瓦の欠片だったとされる。津山が実際に石を投げたか、それが松子に命中し致命傷となったかについて作中で確定されないのは、その如何にかかわらず彼が加害側を構成する一員であった点を明確にするためだろう。母は自分の部落を含む皆から殺されたのだという徳子の主張も、これと合致する。

27 以下の引用は『宮本研戯曲集 第二巻』（白水社、平成元年六月）による。宮本は熊本県天草郡生まれで、昭和一三年から一九九年まで北京で過

ごした。帰国後は大分経済専門学校に入学し、福岡の化学工場に学徒動員された。「四十年目の夏——『ザ・パイロット』のこと」（『テアトロ』昭和六〇年八月）には、郷里の天草で長崎上空の原子雲を見たことが記されている。《その雲の美しさを見た者は生きのこり、あの瞬間に命をうばわれた人たちは雲を見ることもなく死んだ。一瞬のうちに生死を分けたその不条理がなぜか影のようにわたしにつきまとう》（八五頁）。その後、九州帝国大学を卒業、大分で高校教諭、東京で法務省勤務を経て劇作家となった。本作は「反応工程」（昭和三三年）「日本人民共和国」（昭和三五年）とともに戦後三部作の一つとされる。

28 クロード・イーザリー（一九一八—一九七八年）は広島への原爆投下作戦に参加した実在の人物。戦後は英雄として遇されたが、原爆投下は犯罪であり自分は処罰されるべきだと公言するようになった。それを証明するかのように店舗や郵便局へ押し入るなど犯罪行為を重ねたため、精神錯乱とみなされ軍病院に隔離される。そこで彼は、哲学者ギュンター・アンデルスをはじめ諸国の人々と手紙のやり取りをした。《日本へ行くことを考えている》という宮本研が注目した文言は、一九六〇年九月二〇日付けアンデルス宛て書簡にある（G・アンデルス、C・イーザリー『ヒロシマ我が罪と罰』筑摩書房、昭和六二年七月、一九五頁）。

29 宮本研『ザ・パイロット』の美学」（『テアトロ』昭和四〇年二月）  
30 例えば、主に劇構造について「安達原」との関係に注目した大島勉「宮本研『ザ・パイロット』」（『国文学 解釈と鑑賞』昭和四六年三月）は、マリア観音というモチーフとシュルレアリスムをめぐる田中千禾夫「マリアの首」の影響に言及するも、作品名を出すにとどまった。なお、宮本が「マリアの首」だけでなく『地の群れ』も参照していたことは、井

上光晴が創作し作中に挿入した《四月長崎花の町 八月長崎灰の町 十月カラスが死にまする 正月障子が破れはて 三月淋しい母の墓》という手鞠歌を「哀の段」冒頭（一三二頁）に引用していることに明らかである。

31 宮本研「四十年目の夏——「ザ・パイロット」のこと」（注27参照、八五〜八六頁）

32 浦上地区には四つのキリシタン墓地が知られるが、そのうち、サンタ・カララ教会跡から遠くない高台にあるという作中の設定に最も近いのは、浦上川対岸の山里小学校傍に現存する白山墓地である。

33 物語後半には、周囲の者たちに「本物／偽物」をめぐる態度の変化がみられる。筆の息子の六平太は玉音放送の言葉とおりに戦後を盲目となつてただ耐えてきたが、クリスおよび息子・和平とのやり取りのなかで暫し視界が戻る。祝家の窮状に直面した彼は、《ドンにやられた正真正銘の本物》（二四九頁）である妻の骨への執着を断ち切り、売りに行くこととし

た（二五八頁）。また、あぐりを養子にするため訪ねてきたハワイ在住のハリー・平は、当初、彼女にマリア観音を贈ろうと考え、《二七物が多いいいます》（二三三頁）という理由で諦めた。が、祝家の人々やクリスとの交流を経て長崎を去る際、改めてマリア観音を置き土産とした。

34 ただし、クリスがマリア石像の首を盗むのと同時期に、キリシタン墓地の灯籠が一つ増えていたことから、作中に明示されない強盗行為があった可能性も読み取れる。

35 筆はクリスに、《わたしにや、あたのこつが、背中どこにアザのあるかまでようわかる気をする》、《ばってん、人間、何でもわかつてしもうたら話はつまらん。わかってしまうもんでもなか》（二四〇頁）と対話を促す。相手の他者性を尊重しようとする筆の意志が表明された箇所だろう。

（福岡教育大学非常勤講師・立教大学日本学研究所研究員）